

## 「真の自己」はすべての苦を避けられるか—分析インド哲学の観点から—

渡部峻亘（京都大学大学院人間・環境学研究科）

苦痛はどのようにして避けられるのか？この問いは、苦痛に悩まされる私たちが幸せに生きる上で、重要な問題である。この問いに答えを提示した哲学者の一人が、インド六派哲学の一つ、ヨーガ学派の祖と言われる、パタンジャリ・マハリシである。パタンジャリは、口頭伝承であったヨーガの思想をヨーガ学派の経典『ヨーガ・スートラ（瑜伽経）』にまとめ、以降現代にいたるまでのヨーガの歴史に多大な影響を与えたとされる人物だが、『ヨーガ・スートラ』の推定編纂時期が紀元前5～紀元1世紀であることもあり、どの年代の人物なのか、そもそも一人の人物だったのか等、謎は多い(Sachidananda, 2020)。

『ヨーガ・スートラ』においてパタンジャリはまず、この世界にあるすべてのものを「見る者（プルシャ）」と「見られるもの（プラクリティ）」の二つに区別する。「見る者」とは、「真の自己」や「アートマン」とも表される、心や身体の活動を直接的に把握する主体のことだ。他方、「見られるもの」とは、「マーヤー（幻影）」とも表される、心や身体を含む、「見る者」以外のすべてのもののことだ。この区別をした上でパタンジャリは、「見る者」と「見られるもの」の識別によって、「見る者」としての私たちの苦痛はすべてなくなる、と主張する (Sachidananda, 2020)。本発表では、分析インド哲学と称し、このパタンジャリの主張とその根拠を、分析哲学の方法論や概念を用いることによって明確化し、精査する。

発表者はまず、「見る者」と「見られるもの」を識別する主体は「真の自己」たる「見る者」ではなく、「見られるもの」に属する「心」であることを示す。その上で、先のパタンジャリの主張とその論拠を、以下の妥当な論証に再構築する：

- ①心が心と「見る者」を識別するならば、心は心と「見る者」を同一視しない。
- ②心が心と「見る者」を同一視しないならば、「見る者」は苦しまない。
- ③ゆえに、心が心と「見る者」を識別するならば、「見る者」は苦しまない。

発表者は、一つ目の前提が分析的に真であると考えている。その上で、現代の代表的なヨーガ僧侶であるサッチダーナンダ（2020）による解釈を踏まえ、二つ目の前提が必然的に真であることを、反例が想像不可能（unconceivable）である構造を描き出すことにより明らかにする。ゆえに以上の論証は健全であり、心が心と「見る者」を識別する限り、私たちが苦しむことはないということを確認する。

### 参考文献

Sachidananda, S. S. (2020). *新版 インテグラル・ヨーガ パタンジャリのヨーガ・スートラ* [New edition, integral Yoga, the Yoga Sutras of Patanjali] (H. Ito, Trans.). Merkmal Publisher.